

「鎌足桜の魅力」写真と短歌・俳句コンテスト

＜短歌の部 講評＞ 鈴木 眞澄

短歌の部では42の作品をご応募いただきました。

今年も昨年から続くコロナ禍で、外出自粛がなお強く呼びかけられている日々の中ではありましたが、皆さんから昨年変わらず相応のご応募をいただきました。そして、下記のような結果となりました。

鎌足桜保存会会長賞 久富としさんの作品

○ 散りがたの鎌足ざくら夕つ日に染まる花びら惜しみて見上ぐ

すっきりとしていて言葉のつながりに無理がなく、とてもリズムの良い歌です。

「散りがたの」花ととらえた感覚が繊細で、花びらが夕日に染まる桜の木の下に、しずかにたたずむ作者の姿が浮かびます。

新千葉新聞社社長賞 日下部扶美子さんの作品

○ 雲間より光さしきて里に咲く鎌足桜ひときは白し

この歌は、思いがけず雲間からひとときに差してきた光を受けて、鎌足の里に咲くはずこのさくらもことのほか白く見えたというのです。

ひとつひとつの言葉が響きあって、調べの良い一首となっています。

その他、入選は7首でした。

今年度の入賞作品は、一首一首がこの作者でなければ出来ない経験というものが感じられ、とても親しい思いがいたしました。

今年度にて「鎌足桜カレンダー」の発行は終了となりますが、いま手元にある9年間のカレンダー(来年発行のものが10年目)をふりかえってみますと、とても感慨深いものがあります。

皆さんの温かいご支援に心より感謝いたします。